



662号 抜刷 (1995)

昭和女子大学 近代文化研究所

談話レベルから見た敬語使用

—スピーチレベルシフト生起の条件と機能—

“Conditions for speech-level shift occurrence in Japanese discourse”

宇佐美 まゆみ

要 旨

本研究は、同一話者の同一会話内におけるスピーチレベルシフト（敬語の使用から不使用、或いは、その逆の移行）に着目することによって、談話レベルから見た敬語使用のメカニズムを解明し、主に、中・上級の日本語学習者の待遇表現の指導に役立てようとするものである。

対話者の年齢・社会的地位、性が一定の話者のスピーチレベルシフト生起に及ぼす影響を検討するため、男女各一名をベースの被験者とし、彼らにそれぞれ初対面同性の「目上」「同等」「目下」、異性の「目上」「同等」「目下」の6通りの対話者を割り当て、計12通りの会話を計画した。有効データである11会話を、当該会話内の要因（ローカル要因）と当該会話外の要因（グローバル要因）の二側面から分析した結果、尊敬語・謙譲語（＋レベル）、丁寧体（0レベル）を含む発話から、常体（－レベル）の発話へのシフトが生じるローカルな条件として、①心的距離の短縮、②相手の－レベルに合わせる時、③ひとりごと、自問をする時、④確認のための質問、或いは、答えをする時、⑤中途終了型発話の時、の5つがあることが判明した。また、グローバルな要因（相手の年齢・社会的地位、性）の影響としては、全体的に、男女共、目上、異性との会話において、常体（－レベル）へのシフトが少ないということが明らかになった。

日本語学習者がより自然な日本語を修得していくためには、文レベルの文法に基盤を置いた待遇表現の指導のみならず、本研究で扱ったような、同一会話を談話レベルから見た際の、言語形式の丁寧度の「使い分け」の原則をも指導していくことが必須であると思われる。

1. はじめに

日本語における敬語使用は、聞き手の社会的地位や年齢（上・下）、話者間の心理・社会的距離（親・疎、ウチ・ソト）、その場の社会的状況（改まりの度合い）等の、様々な心理・社会的要因によって決定される（南, 1987; 窪田, 1990等）。しかしながら、実際の発話は、これら様々な心理・社会的要因が絡み合って規定されるため、どの要因がどのくらい影響しているかを明確にすることは困難で、ある一定の社会的文脈では、このスピーチレベルが用いられる（丁寧体・常体、敬語の使用・不使用等）というような原則は示せても、現実の会話における敬語の使用と不使用の混在などの、スピーチレベルの使い分け

のすべてを説明することはできない。

その好例として、現実の会話においては、同一相手との同一場面における同一会話内においても、ある発話の素材となっている事柄、相手との心理的距離の変化等、会話の流れに応じて、スピーチレベルの移行が生じるということがある。例えば、敬語を使って話している知り合って間もない知人との会話で、話題等に応じて少し常体を交えることによって、親しみを表すことができる。また逆に、敬語を多用し過ぎて、心せずして相手を心理的に隔ててしまったり、愚痴無礼になったりすることもある。こうして見ても分かるように、敬語というものは使うものであるだけでなく、使わないことによって、話し手の何等かの意図や態度を伝達する機能を持っていると言える。

日本語母語話者は、状況に応じて、意識的・無意識的にこのスピーチレベルを巧みに使い分けているが、日本語を母語としない学習者にとっては、敬語使用の原則には示されていない、この状況に応じたスピーチレベルの使い分けこそが、最も修得の難しい点になっている（ネウストブナー、1982；窪田、1990）。日本語学習者に適切な敬語の使用法をより効果的に指導していくためには、現実の会話におけるスピーチレベルシフト、すなわち、一定の談話内におけるスピーチレベルの混用というような、文レベルを越えた談話レベルの側面からも、敬語使用のメカニズムを解明していく必要がある。

そこで、本研究では、実際に行われた会話のデータに基づき、同一会話内での同一相手に対する敬語の使用と不使用、すなわち、スピーチレベルシフトに着目し、それがいかなる条件のもとで生じているか、また、そのスピーチレベルシフトが談話進行上、いかなる機能を持っているのかを明らかにしようと試みた。スピーチレベルシフト生起の条件については、日本語の敬語選択の条件（南他、1974；南、1987）や、Leech（1992）の3種類の context の概念等を参考に、発話の素材・内容等の言語的要因や心理的距離等の心理的要因（当該の会話内の要因と言う意味で「ローカル要因」と呼ぶ）と、対話者の年齢、社会的地位、性等の言語体系外の社会・文化的要因（当該の会話外の要因という意味で「グローバル要因」と呼ぶ）の影響という二側面から分析した。

2. 方法⁽¹⁾

2-1. 実験計画・手続き

敬語使用、スピーチレベルの使い分けは、Brown and Levinson（1978, 1987）の“politeness theory”で扱われている“politeness”と深く関わっている（「丁寧さ」と訳さない理由、この理論の概観等については、宇佐美（1993c, 1994b）を参照されたい）。本研究では、グローバル要因として捉えた社会・文化的文脈の中でも、特に、対話相手の年齢・社会的地位（「力関係」の要素と仮定）、性とスピーチレベルシフトの生起との関係に焦点を絞って分析する。

そのため、Brown and Levinson の“politeness theory”の枠組みを借り、“linguistic politeness”を規定するとされている三要素、「力関係（power）」「社会的距離（social distance）」「負担の度合い（ranking of impositions）」のうち、すべて初対面の相手との会話に限ることにして「社会的距離」を、同様の場面と同様の話題について話し

てもらふことによって状況要因としての「負担の度合い」を一定に保った上で、男女各一名ずつのベースの被験者に、それぞれ同性の「目上」「同等」「目下」、異性の「目上」「同等」「目下」の6通りの相手と約30分ずつの会話を行ってもらふという、計12通りの会話を計画した。

すべての会話は、名前も含め、互いにはほとんど相手についての情報を知らされていない初対面同士の会話である。状況要因をある程度統制するため、話のきっかけが作りやすいよう「大学生生活、海外生活」という話題で話し始めるよう指示したが、話題の展開、変更は自然にまかせた。また、会話終了後、アンケートと口頭質問の双方によって、被験者全員の言語環境と、相手の年齢や社会的地位をどう捉えたか、自然に話せたか否か等、今回の会話データの妥当性の確認を行った。

この一定の話者の、他の要因を一定に保った際の、ある統制された要因（ここでは、対話相手）に応じた、言語行動の「変容」に着目する方法は、一領域として発展しつつある「会話分析」の方法論を、より科学的なものにしていくための一つの提案であり、試みである。単なる部分の和が、全体と必ずしも一致しないことは、古くゲシュタルト心理学派によって主張されているが、そのことを銘記した上で、あえて個々の要因の働きを一つずつ、より明確にしていくことは、複雑に絡み合っている諸要因をときどきしていくことにつながり、特に日本語のように、社会的文脈への依存度が高い言語における「言語使用」のルールの解明には、必須のアプローチであると筆者は考えている。

2-2. 被験者

アメリカ滞在年数が比較的短く、日本の社会人に適当と見なされている日本語を話すと思われる、ケンブリッジ（Cambridge, Massachusetts）在住の日本人9名（女性5名、男性4名）を被験者とした。以下の表1に、被験者の年齢、性等と簡略化した実験計画を示す。

表1 実験計画・被験者

ベースの被験者		対話者（女性）		対話者（男性）
北原 35歳大学院生 （女性）	会話1 （目上）	高谷 55歳大学教師	会話4 （目上）	高木 39歳大学教育
	会話2 （同等）	西井 38歳大学院生	会話5 （同等）	生田 39歳大学院生
	会話3 （目下）	赤塚 28歳大学院生	会話6 （目下）	滝川 27歳大学院生
生田 39歳大学院生 （男性）	会話7 （目上）	田中 50歳大学教師	会話10 （目上）	高木 39歳大学教育
	会話8 （同等）	北原 35歳大学院生	会話11 （同等）	—
	会話9 （目下）	赤塚 28歳大学院生	会話12 （目下）	池内 米回答大学院生

（注）

- ・ 男性は同一被験者を表す。名前は仮名である。
- ・ 会話5と会話8は同一会話である。
- ・ 会話11は被験者の都合により、採集できなかった。
- ・ 本研究では、実際の年齢よりも、被験者が対話相手を「目上」「同等」「目下」のいずれと捉えるかが重要であるので、それぞれ適当と思われる被験者を実験者が選んだ。実際にどう捉えられたかは、後のアンケートで確認した。

3. 分 析⁽¹⁾

3-1. 分析方法

上記の方法で得られた11種類の会話を文字化したものを、「CHILDES system」(MacWhinney and Snow, 1990; MacWhinney, 1991)を用いて分析した。このシステムは、主に、「スピーチレベル」の頻度算出と「スピーチレベルシフト」の分析に用いた。発話の種類の信頼性は、筆者ともう一名の日本語母語話者⁽²⁾で確認した。話題の流れ等その他の分析は、文字化した原稿と録音テープに基づき、質的分析を行った。

3-2. スピーチレベルの分類

生田・井出(1983)、Ikuta(1983)は、敬語表現(尊敬、謙譲、丁寧語、丁寧体(です・ます体)等)の出現を表す「+レベル」と、それが見られないことを示す「0レベル」という2種類に分類しているが、ここでは、現実には、丁寧というよりは、非常に中立的な響きのある「丁寧体(です・ます体)」の発話と丁寧度のより高い尊敬・謙譲語を含む発話を区別して分析・考察ができるよう、すべての発話を以下の3種類のスピーチレベルに分類した。

+ : 尊敬語、謙譲語、美化語、「わたくし」、「～でございます」等を含む改まり度の高い発話

0 : 丁寧体を含む発話

- : 常体を含む発話や、質問に対する簡略すぎる答え(「いつ頃いらしたんですか。」に対する「87年。」)等、改まり度の低い発話

スピーチレベルは、基本的には以上の分類法によって行ったが、「中途終了型発話」(後述4-3-1.(1)⑤を参照のこと)等、判断の難しいものは、文脈、音声面を考慮して、筆者が判断した。

3-3. スピーチレベルシフト

初対面の成人二者間の会話においては、丁寧体以上(0と+)のスピーチレベルが原則であると考えられる。故にスピーチレベルシフトの分析の際には、逆に、初対面の相手との会話においては出現頻度が少ないと予想される「常体」を含む発話や「改まり度」の低い発話へのシフトに着目する必要がある。従って、丁寧体以上(0と+)をひとまとめとし、同一話者の連続する発話が、+から-、或いは、0から-へ移行したものの双方を「敬語使用から不使用へのシフト」と捉え、結果の表中「+・0→-」と表した。同様に、-から+、-から0へ移行したものの双方を「敬語不使用から使用へのシフト」として、「-→+・0」と表した。以下は、話者Aの+から-へのスピーチレベルシフトの例である。

例) A: こちらは、いつ頃いらしたんですか。(+)

B: え、ですから、87年。(-)

A: あ、ボス、ボストン? (-)

3-4. 分析にあたっての仮説

(1) 敬語使用の原則によると、初対面の成人二者間の会話においては、心理的・社会的距離、改まりの度合いが高いので、対話相手の年齢・社会的地位・性にあまりかわりなく、丁寧体や比較的使用頻度の高い尊敬語・謙譲語(いらっしゃる・申します等)を含む発話、すなわち、「敬語使用」が、会話の大部分を占めるであろう。上記の記号では、0と+を合わせたもので、これを、初対面の相手との会話の「基本レベル」と仮定する。

(2) しかし、一定の談話内では、「基本レベル(0・+)」からはずれる「常体(-)」へのスピーチレベルシフトが生じることがあるはずである。そのシフト生起は、発話の素材・内容等の言語的要因、話者の心理的要因など「ローカル要因」の影響を受けていると仮定し、これらスピーチレベルシフト生起の条件と機能を探る。

(3) スピーチレベルシフトは、一定の談話中の言語的要因、心理的要因によって誘発されるが、スピーチレベルシフトの生起はそのような「ローカル要因」に規定されるだけではなく、当該の談話・会話外の社会・文化的要因としての、対話相手の年齢・社会的地位・性などの「グローバル要因」にも影響を受けると仮定し、その影響も探る。

4. 結 果

以下では、まずデータの妥当性に触れた後、スピーチレベルシフト生起の条件と機能について、発話の素材・内容等の言語的文脈や心的距離の短縮・伸長等の心理的文脈等、当該の会話内の「ローカル要因」と、対話相手の年齢・社会的地位・性等の言語体系外、当該の会話外の社会・文化的要因である「グローバル要因」の二側面に分けて、順に考察していく。

4-1. データの妥当性について

会話後に行われたアンケートと口頭質問の結果によると、どの会話もかなり自然に行われ、特に相手の言動に失礼だと感じられるところはなかったと各被験者から報告されているので、本データに表れた被験者の言語行動は、社会規範に応じた言語行動であったとみなす。(アンケートのより詳しい内容とデータの妥当性の検討法は、Usami(1994)に詳しく記した。)

4-2. 発話の基本レベル

11会話、延べ22名のスピーチレベルを調べると、3-4の仮説(1)で予想した通り、全発話の93.9%が、0または+レベル、すなわち、丁寧体や尊敬語、謙譲語を含む発話となっており、初対面の相手との会話においては、敬語(丁寧体を含む)使用が、「基本レベル」であることを裏付けていた。以下の表2に、各会話、各話者のスピーチレベルの頻度と割合をまとめておく。

表2 各話者のスピーチレベルの頻度と割合

表2-1 北原(女性)ベース

会 話	話 者	スピーチレベル頻度	割合	合	会 話	話 者	スピーチレベル頻度	割合	合
会話1 同性 目上	北 原	+	16	43.2	会話4 同性 目上	北 原	+	5	12.8
		0	21	56.8			0	34	87.2
		-	0	0			-	0	0
	高 谷	+	6	24.0		高 木	+	6	15.4
		0	18	72.0			0	33	84.6
		-	1	4			-	0	0
会話2 同性 同等	北 原	+	4	10.8	会話5 同性 同等	北 原	+	8	21.6
		0	25	67.6			0	29	78.4
		-	8	21.6			-	0	0
	河 井	+	2	6.3		生 田	+	2	5.1
		0	20	71.9			0	37	94.9
		-	10	21.8			-	0	0
会話3 同性 目下	北 原	+	6	20.0	会話6 同性 目下	北 原	+	8	20.0
		0	18	60.0			0	31	77.5
		-	6	20.0			-	1	2.5
	赤 塚	+	2	6.9		池 川	+	2	4.9
		0	23	79.3			0	39	95.1
		-	4	13.8			-	0	0

表2-2 生田(男性)ベース

表2-2 生田(男性)

会 話	話 者	スピーチレベル頻度		割 合		会 話	話 者	スピーチレベル頻度		割 合									
会話7 異性 目上	生 田	+	6	12.2	95.9	会話10 同性 目上	生 田	+	3	6.4	100								
		0	41	83.7				0	44	93.6									
		-	2	4.1				-	0	0									
	田 中	+	3	7.5	95.0		高 木	+	6	12.8	97.9								
		0	35	87.5				0	40	85.1									
		-	2	5.0				-	1	2.1									
会話8 異性 同等	生 田	+	2	5.1	100														
		0	37	94.9								0	0						
		-	0	0								0							
	北 原	+	8	21.6	100														
		0	29	78.4														0	0
		-	0	0														0	
会話9 異性 目下	生 田	+	4	10.3	92.4	会話12 同性 目下	生 田	+	3	8.1	81.1								
		0	32	82.1				0	27	73.0									
		-	3	7.7				-	7	18.9									
	赤 塚	+	5	16.7	93.4		池 内	+	0	0	94.3								
		0	23	76.7				0	33	94.3									
		-	2	6.7				-	2	5.7									

表2は、全体的には、同性の同等、目下の相手との会話で-レベルの発話の頻度が若干高く、異性、目上との会話では、0・+レベルが堅持されているという傾向を示している。しかし、最も-レベルが多い会話でも約80%、全会話の平均で93.9%が0・+レベルの発話となっており、これを「基本レベル」とみなしてよいだろう。

次の項では、むしろ、この初対面の相手との会話の基本レベル(0・+)からはずれる-レベルの使用の方に焦点を当て、それをスピーチレベルのシフトという観点から捉え、スピーチレベルシフトが生じる条件と機能を、「ローカル要因」と「グローバル要因」の二側面に分けて分析する。

4-3. スピーチレベルシフト生起の条件と機能

4-3-1. ローカル要因(当該会話内の談話レベルの要因)

(1) 敬語使用から不使用へのシフト(+・0→-)

本実験で得られた11の会話中に現れた、敬語使用から不使用へのスピーチレベルシフトを分析した結果、+・0から-へのスピーチレベルシフトは、以下の5種類の条件下(2種類の心理的文脈(psychological context)と3種類の言語的文脈(textual, linguistic context))で生起することが判明した。以下に、それぞれの条件と機能を例を挙げながら列挙していく。(例中、「北原」は女性のベースの被験者、「生田」は男性のベースの被験者である。)

① 親しみを表す、冗談を言う時(笑いを伴うことが多い) — 心理的文脈(psychological context) —

機能: 心的距離の短縮

例) 会話2(女性同士・同等)より

北原: リンギスティックですか、ご専門は? (+)

河井: エジュケーションですね、ここは。(0)

→河井: 自分がここにいるのが、わからない…… <笑い> (-)

同性・同等同士の会話で、全体的に最もくだけていた会話の冒頭に近い部分であるが、同じ大学院生という親近感もあるためか、河井は自嘲的発言を笑いながらすることによって、緊張を和らげ、心的距離の短縮をはかっている。

② 相手の「-レベル」の発話に合わせる時 — 心理的文脈(psychological context) —

機能: 相手が「-レベル」を使用し、改まり度の低い発話を用いることで、打ち解け、心的距離を縮めてきたことを示している。それに合わせることによって、相手への共感を示すことになる。ただし、これは、初対面の会話では一時的なものであり、その後の談話の流れに応じて、再び、「0、または、+レベル」の発話にシフトする(敬語不使用から使用へのシフト(-→+・0)を参照)。

例) 会話2(女性同士・同等)より

北原: そちらは、長いんですか。(0)

河井: U. Mass ボストンで、あの、MAを取って、で、去年から、ここ。(-)

→北原: あ、そう。(-)

③ ひとりごとの発話、自問するような発話をする時 — 言語的文脈(textual, linguistic)

context) —

機能：当該の発話が話し手自身に向けられていることを示す談話標識となる。くだけた雰囲気も出るので、心的距離の短縮の働きをすることもある。

例) 会話3 (女性同士・赤塚が目下) より

赤塚：あ、そうですか。(0)

→赤塚：わたしも、学部は、英米、英語学、英米、ん？ 英語学、英米科っていうんだっかな。(笑い)(-)

赤塚：なんか、わかんない、名前…(笑い)(-)

赤塚にとって、相手の北原は目上に当たることもあり、大部分は0か+レベルで話しているが、この例のように、自分の所属していた学科の正式名称を忘れたという文脈で、自問する形の発話をし、-レベルを用いている。やはり、笑いを伴うことによって、打ち解けた雰囲気も出している。

④ 何かを確認したり、確認のための質問をする、或いは、それに答える時 — 言語的文脈 (textual, linguistic context) —

機能：主要な話題の流れの途中で、その内容をよりよく理解するために、何かを確認したい時には、発話を簡潔にすることによって、会話のスムーズな流れを帯らせるのを最小限にとどめる。ただし、多用するとぞんざいな感じがして失礼になる。

例) 会話2 (女性同士・同等) より

河井：こちらは、いつ頃いらしたんですか？ (+)

北原：ですから、87年。(一)

→河井：あ、ボス、ボストン？ (-)

北原：いえ、カリフォルニアに… (-)

女性同士・同等の相手との会話であり、他の会話と比べて、会話のかなり早いうちから、打ち解けた、テンポのよい話し方がなされていた。上の例は、河井が、カリフォルニアにいたことのある北原に、「カリフォルニアではなく、ボストンにきたのが、87年ということか？」と確認する発話であるが、会話の当事者である二人には、上記の言い方で十分意思の疎通はなされている。むしろ現実の会話においては、会話進行上、簡潔な言い方をした方が会話のスムーズに流れることは、よくあることである。そういう意味で、この-レベルへのシフトは、適切に使用されれば、会話の横道にそれるのを最小限にし、話題の主要な流れを保つ機能を持っていると言えよう。以下の2例も同様に解釈できる。

例) 会話10 (男性同士・高木が目上) より

高木：はい、S大学の、あのー、一応、助教授…をしています。(0)

生田：あ、そうですか。(0)

生田：わたくしは、ただ、あの、こちらのほうで、マスターを、いま、勉強してる…… (+)

→高木：あのー、エジュケーション？ (-)

例) 会話9 (異性・赤塚が女性で目下) より

赤塚は、それまで、0、或いは、+レベルで、話してきたが、課題のペーパー (レポート) の枚数を確認する生田の質問には、簡潔に-レベルで答えている。

生田：ペーパー書くと、30ページでしたっけ？ (0)

→赤塚：15から30。(一)

⑤ 中途終了型発話 — 言語的文脈 (textual, linguistic context) —

述部が省略される場合や、複文の場合、従属節のみで主節が省略されたりする発話、すなわち、最後まで言い切っていない発話を「中途終了型発話」と呼ぶ。主節が省略された形の中途終了型発話は-レベルになることが多い。

機能：最後まではっきり言い切らないことによって、明言を避け、発話を緩和したり、相手に発話の機会を与える機能を持つ

例) 会話2 (女性同士・同等) より

北原1：いずれは、日本にお帰りになることもあるんですか？ (+)

河井1：そうですね。(0)

河井2：それに、やっぱり仕事のことを考えると、それが一番… (0)

→河井3：こっちで、アメリカ人に、英語を教えるわけにもいかないし… (-)

上の例では、河井2と河井3が、中途終了型発話となっている。この種の発話は、日本語の実際の会話ではよく見られ、コード化の際、判断しにくいものが多い。テープを聞くと、上の例では、河井2は、述部が続きそうで待ってみるが、結局は、述部が来ない例である。相手が何か言ってくれるのを待っているという感がある。特にくだけた発話という訳ではないので、このような例は、0レベルに分類した。一方、河井3は、「…し」の型で、主節が省略された発話の例である。主節が続き、それが丁寧体を含んでいれば、従属節内は常体でよいが、この例では、日本語の会話にはよくあるように、話者が最初から主節を続けるつもりではなかった感がある。その場合は、下線部「いかないし」を「いきませんし」と丁寧体にすることができるにもかかわらず、あえて常体が使われていると判断して、-レベルに分類した。このような中途終了型発話に、-レベルの発話が多いのは、一種の言語的文脈の影響と考えられる。

次に、敬語不使用から使用へのシフトを見ていく。

(2) 敬語不使用から使用へのシフト (→+・0)

→から+・0へのスピーチレベルシフトは、以下の3種類の条件下で生じていた。

以下に、それぞれの条件と機能を例を挙げながら挙げていく。

① 「-レベル」の発話の後、「基本レベル (+・0)」に戻る — 言語的文脈 (textual, linguistic context) —

機能：4-3-1. (1) で述べたいずれかの条件下で、特定の状況において適切とみなされている基本スピーチレベルから、一時的に離れた後、すぐに基本レベルに戻ることによって、先のスピーチレベルの使用が一時的なものであり、当該の場面で適切とみなされている基本レベルから逸脱しようとした訳ではないということを示す。

例) 会話3 (女性同士・赤塚が目下) より

北原1: カリフォルニアのどのあたりですか。(0)

赤塚1: カリフォルニアは、あの一、すごく田舎の方なんですけど…。〈笑い〉(0)

北原2: どっちかって言うと南? 或いは、サンフランシスコとか、北の方? (一)

赤塚2: どっちかって言うと、北の方なんですけど…。(0)

→北原3: あ、そうですか。(0)

北原は、北原2の発話で、先に記したように、確認の発話として「一レベル」へのシフトを行っているが、その次の北原3の発話では、再び「0レベル」に戻っている。これは、北原2の「確認質問」のための「一レベル」使用が一時的なものであり、確認が終わると、すぐに「基本レベル」に戻っていると捉えられる。

② 新しい話題を導入する時 — 言語的文脈 (textual, linguistic context) —

機能: 話題 (小話題)、すなわち、談話ユニットが変わることを示す談話標識の機能も果たしている。書き言葉では、いわゆる段落の変わり目は改行等で示され、話し言葉では、原則として接続詞やその相当語がその役割を担っているとされているが、さらに、話し言葉においては、スピーチレベルシフトも談話ユニットの論理的構造の展開を示す談話標識の機能を果たしていると考えられる。

例) 会話2 (女性同士・同等) より

河井: こちらは、いつ頃いらしたんですか? (+)

北原: ですから、87年。(一)

河井: あ、ボス、ボストン? (一)

(中略) 〈少し、一レベルが続く〉

北原: 去年の、7月かなんかに。(一)

→北原: そちらは、長いんですか。(0)

北原の最後の発話で、「北原がいつ頃アメリカに来たか」という北原に関する話題を終え、「河井もアメリカ生活が長いのか」という河井に関する新しい話題が導入されたと捉える。敬語不使用の発話が互いに続いた後なので、なおさら、改まり度が高い丁寧体の使用が、小話題の移行を示す談話標識としての効果をあげている。

③ 新しい話題を導入する質問に答える時 — 心理的文脈 (psychological context) —

機能: 新しい話題が導入される時に、一レベルから0、或いは、+レベルへのシフトが談話標識の役割を果たしていることは前述の通りだが、一つ前の談話ユニットで、少し連続して一レベルを用いていても、相手が新しい話題を導入する質問で、0、または、+レベルを使用した際、それに答える時は、0、または、+レベルを用いる。これは、談話標識としての機能より、むしろ、相手の発話のレベルに合わせることによって、礼儀を保っているものと思われる。

例) 会話3 (女性同士・赤塚が目下) より

赤塚: あ、そうですか。(0)

赤塚: わたしも、学部は、英米、英語学、英米、ん? 英語学、英米科っていうんだっかな。〈笑い〉(一)

赤塚: なんか、わかんない、名前… 〈笑い〉(一)

北原: 〈笑い〉

北原: 東京ですか? (0)

→赤塚: いえ、九州です。(0)

例) 会話2 (女性同士・同等) より

河井: 自分がここにるのが、わからない… 〈笑い〉(一)

北原: 植田さんとは、同じプログラムですか? (+)

→河井: はい、そうです。(0)

4-3-2. グローバル要因 (当該会話外の人間関係等の社会・文化的要因)

南他 (1974) 及び、南 (1987) では、敬語選択の条件を、大きく「外的条件 (言葉の世界の外の人間関係など)」と「内的条件 (言語体系内の文法など)」の二つに分けているが、その外的条件にはほぼ相当するものを、ここでは、前述の「ローカルな要因」と対比させるため、「グローバルな要因」とした。

これまでのローカル要因の分析から、スピーチレベルシフトが生じる際の、心理的文脈、言語的文脈等、当該会話内のローカルな条件を明らかにしてきた。しかし、これらローカルな条件が整えば、いつでもスピーチレベルシフトが生じるかという点、そうではない。ここでは、スピーチレベルシフトの生起に間接的に影響を及ぼしていると考えられる、当該会話外の人間関係 (本研究では、対話相手の年齢・社会的地位、性) に焦点をあてて、グローバルな観点からその影響を分析した。

以下の表3に、各話者の対話相手に応じたスピーチレベルシフト生起の頻度と割合を、又、表4に、スピーチレベルシフト生起の条件別頻度をまとめる。

以下の表3からわかるように、全体的には、同性同士の会話の場合、目上の相手との会話においては、同等、目下の相手との会話におけるよりも、0・+レベルから一レベルへのシフトの頻度が少ないという傾向を示した。

また、異性との会話においては、相手の年齢・社会的地位にかかわらず、一レベルへのシフトが非常に少なく、0・+レベルの発話が堅持されていることが分かる。この傾向は、女性のベース北原に特に顕著であった。北原は、異性に対しては、会話6で目下に当たる滝川に対して、一レベルへのシフトを1回行っただけである。しかも、この一レベルは、表4から分かるように、「心的距離の短縮」ではなく、述部が省略された「確認」の用法である。このことは、一レベルの使用は、ともすれば馴れ馴れしい印象を与えたりして誤解を生じやすいため、特に女性は、初対面の異性に対して、一レベルの発話することを控える傾向にあることを示している。

また、表4を見ると、初対面二者間の会話ということもあって、全体的にも「心的距離の短縮」のための一レベルへのシフトは比較的少なく、「中途終了型発話」や「確認のための質問や答え」等、言語的文脈の影響による一レベルへのシフトの方が多いことが分かる。「心的距離の短縮」の一レベルが最も多く使用されているのは、同性同等の相手との会話であることが分かる。

表3 各話者のスピーチレベルシフトの頻度と割合

表3-1 北原(女性)ベース

会 話	話 者	スピーチレベルシフトの頻度	割 合	会 話	話 者	スピーチレベルシフトの頻度	割 合
会話1 同性 目上	北 原	+・0 → -	0	会話4 異性 目上	北 原	+・0 → -	0
		- → +・0	0			- → +・0	0
	高 木	+・0 → -	1		高 木	+・0 → -	0
		- → +・0	4.0			- → +・0	0
会話2 同性 同等	北 原	+・0 → -	4	会話5 異性 同等	北 原	+・0 → -	0
		- → +・0	10.8			- → +・0	0
	阿 井	+・0 → -	7		生 田	+・0 → -	0
		- → +・0	21.9			- → +・0	0
会話3 同性 目下	北 原	+・0 → -	5	会話6 異性 目下	北 原	+・0 → -	1
		- → +・0	16.7			- → +・0	2.5
	赤 塚	+・0 → -	3		滝 川	+・0 → -	0
		- → +・0	10.3			- → +・0	0

表3-2 生田(男性)ベース

会 話	話 者	スピーチレベルシフトの頻度	割 合	会 話	話 者	スピーチレベルシフトの頻度	割 合
会話7 異性 目上	生 田	+・0 → -	2	会話10 同性 目上	生 田	+・0 → -	0
		- → +・0	2			- → +・0	0
	田 中	+・0 → -	1		高 木	+・0 → -	1
		- → +・0	1			- → +・0	1
会話8 異性 同等	生 田	+・0 → -	0	会話12 同性 目下	生 田	+・0 → -	5
		- → +・0	0			- → +・0	5
	北 原	+・0 → -	0		池 内	+・0 → -	1
		- → +・0	0			- → +・0	1
会話9 異性 目下	生 田	+・0 → -	3	注)「割合」は、各話者の全発話数に対するスピーチレベルシフトの割合を示す。			
		- → +・0	3				
	赤 塚	+・0 → -	2				
		- → +・0	2				

5. 考 察

以上の結果を総合的に考えると、ローカルな要因(親しみを表す、確認する等)がスピーチレベルシフトを生じさせる条件として、その生起に直接関わっているのに対して、グローバルな要因(相手の年齢・社会的地位、性等)は、スピーチレベルシフト生起の「頻度」を規定するという形で、間接的にスピーチレベルシフト生起に係わっているということ

表4 各話者のスピーチレベルシフト生起の条件別頻度(グローバル要因)

表4-1 北原(女性)ベース

スピーチレベルシフト	同性との会話					異性との会話				
	目上	高木	同等	阿井	目下	赤塚	目上	高木	同等	生田
+・0 → -										
1) 心的距離の短縮	0	1	2	1	0	0	0	0	0	0
2) 相手の「レベル」の発話にあわせる時	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
3) ひとりごとの発話、自問するような発話	0	0	0	0	1	2	0	0	0	0
4) 確認や、確認のための質問、或いは、答え	0	0	1	1	2	0	0	0	0	1
5) 中途終了型発話	0	0	0	5	2	1	0	0	0	0
計	0	1	4	7	5	3	0	0	0	1
- → +・0										
1) レベルの発話のあとに基本型に戻る	0	1	2	3	4	2	0	0	0	0
2) 新しい話題を導入する時	0	0	2	0	1	0	0	0	0	1
3) 新しい話題を導入する質問に答える時	0	0	0	3	0	1	0	0	0	0
計	0	1	4	6	5	3	0	0	0	1

表4-2 生田(男性)ベース

スピーチレベルシフト	同性との会話				異性との会話				
	目上	高木	目下	池内	目上	田中	同等	北原	目下
+・0 → -									
1) 心的距離の短縮	0	0	1	0	0	0	0	0	1
2) 相手の「レベル」の発話にあわせる時	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3) ひとりごとの発話、自問するような発話	0	0	1	0	2	0	0	0	1
4) 確認や、確認のための質問、或いは、答え	0	1	3	1	0	1	0	0	1
5) 中途終了型発話	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	0	1	5	1	2	1	0	0	3
- → +・0									
1) レベルの発話のあとに基本型に戻る	0	1	5	1	2	1	0	0	3
2) 新しい話題を導入する時	0	0	0	0	0	0	0	0	0
3) 新しい話題を導入する質問に答える時	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	0	1	5	1	2	1	0	0	3

注) 目上、同等、目下の欄は、ベースの被験者の、それぞれ目上、同等、目下の相手との会話におけるスピーチレベルシフトの頻度である。又、高木等名前のあるものは、その話者の、ベースの被験者との会話におけるスピーチレベルシフトの頻度である。

が分かる。また、親しみを表す、確認する等のローカル要因が増えれば、誰に対してもスピーチレベルシフトが生じるかというそうではなく、現実には、日本社会の習慣では、初対面の目上の相手や異性に対して、一レベルへのシフトをすることはあまりないということを示しており、グローバル要因（対話相手の年齢・社会的地位や性等）のスピーチレベルシフト生起に対する間接的制約をよく表している。

これらの結果は、実際の会話における敬語使用（スピーチレベル）を談話レベルから分析すると、相手に応じた「適切な使用頻度」というものが明らかになってくることを示している。宇佐美（1994a）は、異なる機能を持つ「ね」が同一話者によっても、場面によって顕著に使い分けられていることを示し、同じ言語形式でも、その機能によって、特定の場面における適切な使用頻度が異なることを示している。また、“politeness”を「適切な使用頻度」という観点からも捉えていくことの必要性を主張している。

言語形式自体の丁寧度（「行く」より「いらっしゃる」の方が丁寧度が高い等）ではなく、それが実際に用いられたコンテクストの中で、相手に好印象を与えるのか、或いは、相手を不愉快にさせるのかといった語用論的“politeness”という観点から言語行動を考えると、このスピーチレベルや特定の言語形式の、相手や場面に応じた「適切な使用頻度」という概念は、非常に重要な意味を持つてくると思われる。また、この「適切な使用頻度」という概念は、言語使用を談話レベルから捉える際にのみ考察できることであり、言語使用、及び、“politeness”を、談話レベルから分析することの重要性を裏付けるものであると言えよう。

6. 日本語教育への応用

これまでの日本語教育における敬語指導は、例えば、友達には「行く」、先生には「いらっしゃる、おいでになる」など、文レベルにおける相手や場面による使い分けに焦点を当てたものがほとんどであった。しかしながら、本研究で取り扱ったように、実際の会話では、同じ会話の中でも、スピーチレベルの混用が見られる。しかもそれは、無意味で不規則的な混用ではなく、心理的な、或いは、談話管理上の機能を有した、規則的ともいえるスピーチレベルのシフトであることが明らかになった。

日本語母語話者は、意識的・無意識的にスピーチレベルを巧みにシフトさせながら、コミュニケーションをスムーズに進め、人間関係を円滑に保とうとしているのである。これは、Brown & Levinson (1978, 1987) の定義する“politeness”のための、一種の戦略とみなすことができる (Usami, 1993)。そして、この戦略の適切な使用が、会話における自然な日本語らしさをもかもし出しているといえる。しかしながら、日本語学習者にとって、最も修得が困難なものの一つが、このスピーチレベルの適切なシフトのさせ方なのである。

今後、特に、中・上級の日本語学習者が、コミュニケーションをより円滑に、巧みにするための一つの戦略としての、適切なスピーチレベルシフトが行えるよう導いていくためには、学習者に敬語の使用法を指導する際には、初対面の相手との会話か友達との会話か等の談話の種類や性質に応じたスピーチレベルの「基本レベル」の使い

分けを指導するだけでなく、本研究で示したように、同一会話を談話レベルから捉え、その中で生じるスピーチレベルの混用の中での使い分けの原則をも指導していくことが必須である。そのためには、まずは日本人母語話者の会話におけるスピーチレベルシフト生起の条件や機能を、「ローカル要因」と「グローバル要因」の両側面から解明していく必要がある。今後も、さらに被験者数を増やして、本研究結果の信頼性の検討、修正を行いたい。

注

- (1) 研究目的、被験者の数等は異なるが、実験手続き、スピーチレベルの分類、頻度算出等の基本的分析方法は、宇佐美（1993a, 1993b）と同様である。重なる部分もあるが、本稿の展開上必要と思われる部分は、改めて記したことをお断りしておく。また、より詳しい手続きについては、上記論文を参照されたい。
- (2) 発話のコード化の第二コード者として信頼性の確認に御協力下さったハーバード大学大学院生の南雅彦氏に、この場を借りて感謝の意を表する。

引用文献

日本語文献

- 生田少子・井出祥子 1983. 「社会言語学における談話研究」『月刊言語』12-12, 大修館書店
- 宇佐美まゆみ 1993a. 「初対面二者間の会話の構造と話者による会話のストラテジー：話者間の関係による相違—日本語の場合」『ヒューマン・コミュニケーション研究』（日本コミュニケーション学会）, 第21号：25-40.
- 1993b. 「初対面二者間会話における会話のストラテジーの分析：対話相手に応じた使い分けという観点から」『学苑』（昭和女子大学近代文化研究所）, 第647号：37-47.
- 1993c. 「談話レベルから見た“politeness”：“politeness theory”の普遍理論確立のために」『ことば』（現代日本語研究会）, 14号：20-29.
- 1994a. 「場面に応じた「ね」の使い分け：語用論的“politeness”という観点から」, 東京女性財団1993年度助成研究報告書『職場における女性の話しことば』（現代日本語研究会）, 51-60.
- 1994b. 「言語行動における“politeness”の日米比較：談話レベルにおける“politeness”の普遍理論確立への模索」『スピーチ・コミュニケーション教育』（日本コミュニケーション学会）, 第7号：30-41.
- 窪田富男 1990. 「敬語教育の基本問題（上）」, 国立国語研究所
- ネウストブニー, J. V. 1982. 「外国人とのコミュニケーション」, 岩波新書
- 南不二男 1987. 「敬語」, 岩波新書
- 南不二男・林大・林四郎・芳賀綾 1974. 「敬語の体系」『敬語講座①敬語の体系』, 明治書院

英語文献
Brown, P. and Levinson, S. 1978. Universals in language usage: politeness phenomena. In Goody, E. N. (ed.) *Questions and Politeness: Strategies in social interaction*. Cambridge University

Press: 56-289.

Brown, P. and Levinson, S. 1987. *Politeness: Some universals in language usage*. Cambridge University Press.

Hashimoto, I. 1992. The function of honorifics as Japanese conversational strategy. BA Thesis. Japan Women's University.

Ikuta, S. 1983. Speech level shift and conversational strategy in Japanese discourse. *Language Sciences*, Vol. 5, No. 1. 37-53.

Leech, G. 1992. Context: A necessary but impossible construct. Paper presented at the British Council Applied Linguistics Conference: Tokyo.

MacWhinney, B. 1991. *The CHILDES project: Tools for analyzing talk*. Lawrence Erlbaum Associates, Publishers.

MacWhinney, B. and Snow, C. 1990. The child language data exchange system: An update. *Journal of Child Language*, 17, 457-472.

Usami, M. 1993. Politeness in Japanese dyadic conversations between unacquainted people: Influence of power asymmetry. Paper presented at the 10th World Congress of Applied Linguistics. Amsterdam. August 8-14.

Usami, M. 1994. Politeness and Japanese conversational strategies: Implications for the teaching of Japanese. Qualifying Paper submitted to Harvard University, Graduate School of Education.

(付記) 本稿は、「平成4年度日本語教育学会秋季大会」における口頭発表の内容に加筆・修正を施したものである。

(うさみ まゆみ 日本文学科)

宇佐美まゆみ(1995)「談話レベルから見た敬語使用:スピーチレベルシフト生起の条件と機能」『学苑』662、昭和女子大学近代文化研究所:27-42. 16頁. 1995年2月.